

アイルランド問題の理解のために

—その歴史的背景のスケッチ—

ワット・タイラー
草 浦 公 英(訳)

私はアイルランド人ではない。私は英国人であり、アイルランド「問題」については英国人に伝統的潜在態度を身につけている。この事実から、アイルランドでの出来事について私が理解している事には限界がある。私の知識は、アイルランド人同志と生活した二年間、ベルファーストで一週間、それに、本土への帰路、英国特別警察に逮捕された事の三つに基づいている。ベルファーストでは、私は新教徒(プロテスタント)の家庭で生活し、プロビジョナルIRA(臨時アイルランド共和国軍)の結婚式に参列し、オフィシャル(公式)IRAの友人達を訪問した。この様な限定された知識で、アイルランドの状況の政治分析を試みる積りはない。敢えてしやう

とは思わない。私は以下の三つの説明をしようとするだけである。つまり、現在の状況をもたらした理由の歴史的な説明、過去五年間の流血の衝突を引起した「南」「北」アイルランドの諸条件の説明、最後に、今バリケードをはさんで互いににらみ合っている勢力特にIRAの本質の説明、である。

△はじめに▽

北アイルランド問題は、宗教問題ではない。植民地問題である。植民者と先住民との「人種的」区別(もはや、そんな区別は存在しないのであるが)は、肉体的な違いではなく、宗教的な違いで示される。新教徒と旧教

徒（カトリック）が争う場合、それは宗教的な原理を守るために争うのではない。（全ての人と言わなくとも、少くとも大多数にとってはそうではない。）社会的・政治的現状を維持するのか、打壊すのかという点で争われるのである。二百年程前に、この「人種」区別は消えなかった。この時は、英国権力によって再びこの区別は鮮明にされた。植民地構造を支える為である。今日に至るまで、アイルランド労働階級は宗教的帰属意識という間違った意識によって中央分断されている。この分断は、元々英国支配階級によって作り出され、現在もおお、英国及び両アイルランドの政治家達によってそのみぞは堀り下げられている。労働階級を支配している資本家と地主の連合に対抗する労働者階級の同盟を、新旧両教徒の間に結成させようという試みは必ず、次の二つに一つの結末をたどり、不成功に終ってきた。この試みに主要な責任のある人々が、どこかの暗い小路で、縛られたまま殺されてみつかるか、或いは、奇妙な一致なのであるが、話し合いが正に成功しようという時に、何かの残虐行為で、二つの社会の間の憎悪がかきたてられるか、である。そんな同盟は、英国によるアイルランド支配が幕を下し始めた事を意味する。だから、こんな結末の責任が、誰にあるのかを決めるのにそれほど想像をたくましくする事もない。

企てである。宗派心の神話を生き長らえさせているのは英国権力の存在である。

▲現在の衝突の起り▼

一九六九年にベルファーストとデリー（ロンドン・デリー）での激烈な闘争の発端は、八月十二日であった。この闘争は数日のうちに英国の干渉を招き、英国の兵士が、北アイルランド政府の法と秩序の力に代わることになった。衝突がこの日に始まったというのは一六八九年のこの日に、新教徒勢力によって旧教徒の包囲からロンドンデリーが解放され、それをデリー市が毎年祝う記念日だからである。（ベルファーストと北アイルランドの残りの都市では、偉大なる日は七月十二日、つまりウィリアム三世が一六九〇年、ボイン河の戦でジェームス二世の旧教徒軍を破った勝利記念日である）十七世紀の事件が、明らかに、新教徒の支配権、旧教徒の服従の両方について、今日のアイルランドにとって大きな意味を持っている。

英国の権力が拡充される以前には、アイルランドは、幾つかの好戦的部族に分かれていた。その為アイルランド人は、英国人の侵略に対して有効な抵抗を組む事が出来なかった。そして大体は、皆殺し戦略によって、英

一九六五年以降は、北アイルランドに急激な社会変化が起った時期である。一九六〇年代後半には市民権運動が現われた。市民権運動は一九二〇年に英国政府が定めた宗派色の濃い規則の体系を崩壊させる最初のきざしであった。アルスター地方は、アイルランドで新教徒が多数派を占め得る唯一の地区である。アルスター地方から六千平方マイル（兵庫県の倍足らず——訳註）が分離された。北アイルランド（地区名称に従えばアルスター）は、スコットランド、ウェールズ同様、連合王国の構成部分となり、同時に自治国家となった。アイルランド本土では、少数派である新教徒の連合主義者（大英帝国との連合）と多数派である旧教徒の民族主義者との間の直接的協定を取り決める為の何等の試みも、英国によって試みられなかった。換言すれば、北アイルランドの政体は、外部勢力に押しつけられた体系であり、現在もそうである。その勢力とは英国である。又その問題は植民地問題である。そして、これが現在、国土を引き裂いている暴力の源である。英国という力が存在する事で、北アイルランド政府は、常に少数派である旧教徒の希望を無視し続けることが出来た。今日の問題は、植民地体制から生じている。その植民地体制を通じてアイルランドを支配統治するというのが、過去三百年間に渡る英国の

国の支配は徐々に浸透していった。十六世紀初頭に植民地化が始まった。そして、先住民は、確実に内陸部へ押しやられていった。しかし、一六四九年までは、植民地化は余り成功してはいなかった。この年、オリバー・クロムウェルが議会軍（新教徒）の長となり、国王軍（旧教徒）の兵士を打ち破り、先住アイルランド人の多数を大虐殺したのである。この虐殺以後、アイルランド全土に及ぶ大規模な土地没収は、新しい地主階級を成立させる事になった。欧州全土に及ぶ、特に英国での、激烈な宗教戦争を背景としての、植民地化の過程は起った。その事から宗教が、一方で土地を奪われた先住民、他方で侵略者を区別する印の一つとなった。しかし、宗教は、外面的特徴にすぎなかった。十六世紀アイルランドは、部族時代以来の伝統的信仰であるローマ旧教を残していた。アイルランドで土地——先住アイルランド人から取り上げられた土地——を与えられた植民者は新教徒であった。こうして信仰上の区分が、搾取者を被搾取者から区別する記号となったのである。植民地化政策の結果は、百パーセントが旧教徒である地方に、新教徒の少数の地主支配階級を作り出した事であった。これら支配者は、その信仰の故に罰したり、新教徒となる事を強いるという為ではなく、旧教徒が、財産、地位、影響

力或いは権力を獲得するのを妨害する為に、ローマ旧教に対しての刑法を制定しはじめた。こうして差別の社会的・政治的本質が、あらわにされたのである。

この態勢は、今日に至るまで、アイルランド全土でなお支配的である。十八世紀後半の暴動は、支配者に対する新旧教徒の別なき底辺階級の一般的反乱を明らかに示している。この反乱は、宗派心をかきたてるという、支配階級の有効な努力によって鎮静されるに終わった。これの後に、一八〇一年の連合法が通過成立し、ウェストミンスターに単一議會を置くアイルランド・英国両王国の連合ができた。これが連合王国である。しかしアイルランドは依然として植民地のままであった。十九世紀中頃に大飢饉が起った時、国土のほとんどの所で最貧困階級のほとんどが死亡し二年間で人口は八五〇万人から六五〇万人に落ち込んだ。この時、英国政府は、災害をくい止める努力をほとんどしなかった。

北アイルランドの現在の状況に係りのある限りでの、飢饉の最も重要な影響は、この飢饉の余波から起ったのである。都市、とりわけベルファーストへの人口流入は、主に旧教徒によるものであった。人々はみすぼらしく、半分餓死しかかっていた。この移住者は、食うや食わずやの賃金でも働こうとするだけに、既にベルフ

さらに社会主義者の軍ができた。その結果、英国議會の中に、アイルランド自治法を通過せようとする動きが保守党のアイルランド支配層の強い反対を押して、起ってきた。

アイルランド政府法は、遂に、一九二〇年十二月に通過し、北部六県の為に独立した議會が設立された。島の人口の三分の一が、全島の五分の一の面積に集められているこの地域は、北アイルランドと呼ばれていた。この時、出来るだけ広い地域を含むように、しかも同時に、英国との連合の支持者が、二対一の割合で安泰な多数派を形成する様に図られていた。これが数年前まで続いていた政治体制である。この後の法律で、南部に南アイルランドと通称されているアイルランド自由国（一九二二年成立、後完全独立する。現在のエール——訳註）一九二二年中頃から、一九二三年中期にかけて、南部新政府と英国からの一層の独立を求めるより急進的な共和主義者との間で、悲惨な内戦が起った。（事実、アイルランド自由国は、大英帝国の王冠の下で連邦の一員の地位にあった。）農村ソヴィエトが形成されたが、それは、政府のひどい圧迫をうけた。そして、地主から土地を収用しようという小作人達の試みは、全く効果的に阻止された。植民地の行政の多くのものがそのままになっていた。

ファーストに住んでいる新教徒の賃金奴隷にとっては脅威を感じさせるものであった。こうして、最初の激しい宗教的暴動が、飢饉以後の十年間に始まった。そして、新教徒の支配権を誇示しようとする狂信的党派「オレンジ団」（現代も、新教徒政治家がメンバーになっている）は、空腹をかかえた旧教徒の経済競争からの保護を求める貧しい労働者から、多くの新団員を引き出した。こうして飢饉の影響を緩和する事を当局が拒否した事から、労働階級の間での宗教的派閥は発生し、それが今日まで続いている。社会主義が欧州全体に拡がり、産業労働者を政治活動の可能性へと目覚めさせている時に、アイルランドの産業労働者は分断されたのである。そしてこの分断は中上流階級の利益のために強化され、維持された。

二十世紀初頭には、今日なお活動を続けている多くの政治活動が生まれた。一九〇五年に現在のIRA政治部であるシンフェイン党（「我々自身でVの意味——訳註」）が設立された。一九一三年には、アルスター義勇軍が設立された。この流れを継承する部分は、新教徒の軍隊類似組織のうちで、最も戦闘的な部分の一つである。その後、アイルランド市民軍、アイルランド義勇軍（IRAの前身）が組織された。一九一四年までに、アイルランドには、英占領軍のみならず、民族主義者、連合主義者、

そして一九二〇年代前半までに反革命は、アイルランド南北両方で勝利を収めていた。北部では新しい武装警察（Bスベシャルの名で知られる）とIRAの間では別の内戦が戦われていた。このBスベシャルは、全て新教徒により成っており、多くの反旧教徒残虐行為に責任がある。

飢饉の三〇年代（一九三〇年代）は、連合主義者である支配層に、最初の現実的脅威をもたらした。失業は二五%にも達し、労働者は、政府に対するパン寄せ行進（飢饉行進）やデモを、新旧両教徒が一緒になっで行った。政府自身は、自分の敵が旧教徒ではなく、国内多数派である新教徒労働者であると見ていながら、先例に習って、宗派的大衆煽動をやり始めた。これ以後、失業や飢饉等が新教徒労働者の注意を旧教徒の乗取りからそらし始める時はいつも、それを旧教徒労働者に思い起こさせようとする煽動的演説を、政府は尻押しした。このカースト体制は、次の様なものの複合によって一層強化された。つまり、旧教徒に対する（政府によって助長された）雇用差別、会社・商店（ほとんどが新教徒の手に握られている）に特別投票権を与える事での選挙体系の操作、さらに、ゲットーの条件を作り出す様に仕向ける地方自治体財源の操作、これらの複合である。人口の三分の一

(旧教徒)に対する、この基本的市民権の否定は、一九六〇年代にまで続いた。

▲北アイルランドの社会条件

連合主義者政府の政策は、徹頭徹尾、英国本土の発展と緊密な関係を保つ様に図られた段階的(「一步一步」)政策であった。一九三九年の戦争(第二次大戦)までこの政策は保守的なイングランドが、大体は欧州労働運動の影響からほぼ無傷のままだったので、さ程の問題も起さなかった。戦後は、しかし、急速な社会変化、とりわけ、福祉国家の導入が、旧教徒抑圧を続ける政策に、多くの困難を生み出した。旧教徒の失業率は同地域全体の失業に比較して、常にほぼ二倍の高きに昇っていた。これが、移民への圧力となって多くの人々にかかっていき、その結果、旧教徒の高出生率にもかかわらず、両教徒の人口比は安定的に保たれていた。しかし社会給付の導入によって、移住の必要性は薄れた。北アイルランドの成立以来、この高出生率は、数の上での優越性を奪われる危険性について政府が新教徒国民に対して絶え間なく発する警告の課題であった。こうして、保守的政策は、新教徒の政策という皮をかぶり、労働運動は分断され、労働党政権を英国権力に選出するという穏健な傾向さえも

が不可能とされているのである。

この様に、相互不信が北アイルランドの政治制度の礎石であった。「旧教か新教か」は北アイルランドでは基本的な区別となり、アメリカで「黒人か白人か」の区別が及ぼすと同じ程に広範囲な影響を行動と態度に及ぼした。学校も社会活動も分離されていた。ほとんどの街で、居住区は厳密に分け隔てられていた。宗派を越えての結婚は稀であった。これら全てが両社会の地位の間にある、常に非常に明確な、経済的差違によって強化された。文化的差違もある。アイルランド人は旧教徒の学校で教育され、旧教徒は、自分達がアイルランド人であるという自覚を、一層強く持っている。

この差別は雇用にもち込まれる。小企業では、特に家内企業では、旧教徒は雇用されない。大企業、公企業でも、低水準でのみ雇用される。旧教徒が半数以上を占めるある州会の雇用者は、一九六九年三月で旧教徒三十二人に対して新教徒は三百三十八人であった。同様の政策が、住居配分にも持ち込まれていた。主に選挙の為に住民を旧教徒地区と新教徒地区に区分する為である。先にあげた州では、一九六九年までに政府によって建設された家屋一五八九戸のうち、一〇二一戸は新教徒によって占められ、旧教徒には、わずかに五六八戸割り当てら

れたにすぎなかった。選挙区の線引も、連合主義者候補者の選出が保障される様に引き直された。その古典的典型がデリーである。一九六六年に、旧教徒投票者二万人に対して八人、新教徒投票者一万人に対して一人の市議員が選ばれた。旧教徒はこの二対一の割合の多数派を市内で占めているにもかかわらず、連合主義者が支配する地域で家を買う事は不可能であると悟るのである。支払いに充てる金は持っていたとしてもである。(大体は持っていない)

こうして一九六〇年代末までに、北アイルランドは、その民主的外観にもかかわらず、事実上一党国家となった。ここでは偏見、両方の側の純粋な不安と伝統そして、議会民主主義形態を操るものは、住民の三分の一に対する専制として、又、思い起こさせるものに対する麻酔として働く機構を創り出した。しかし、二つの大きな弱点

があった。一つは労働運動内部に、英国での対応物、英国労働運動の影響の下に、社会的範疇を社会階級によって再定義しようという傾向が強まって来た事であった。これは政府自身に強いられた分析の宗派的な基礎をおびやかした。今一つのものは、イングランドで労働党政策によって創り出された社会民主主義に基づく制度の浸透である。これは、連合主義者体制の政治構造を次第に浸蝕していった。この二つの力が一九六〇年代に、市民権運動に収束した。この運動の誕生は、今日にまで至る闘争の始まりを示している。本論の後半で、私は市民権運動の発展と、それに続く他の社会的・政治的勢力の発展を跡付ける積りである。

(続く)

七五年二月・草浦公英訳

LIBERO INT'L

創刊

☆

CIRA-NIPPONと、
海外との交流を促進し
日本・アジアの絶対自
由主義運動、社会運動
の紹介を目的とするA
5版英文雑誌。

(平均40頁・年4回)

資金援助の意味で年間
購読をして下さい。

☆

*年間購読料 1500円

(郵送料込)

*申込は

CIRA-NIPPON
国際通信部

* (650-91)

神戸中央郵便局
私書箱 1065号

挽歌 (十一番)

山口英

やあ、あいかわらずですなあ
ちっともかわっていませんなあ
戸はかたむいたままでほこりだらけ
車を通るたびにガタガタゆれる。
窓ガラスもわれたまま
あのつぎはぎにもおぼえがある

あんたはどっかとあぐらをかき
しかつめらしい顔で一日中本を読んでいる
客が「たばこ」と声かけると

くるりとむいてにゆっとさしだす

だまってかねをうけとっては

すばやく銭箱にほうりこむ

わざとがちゃんと音をたてて

ほくにすすめてくれたイスも

ちゃんとそこにありますし

ばんじむかしのままですなあ

いや、かわったといえは

あんたの顔だ

すこし小さくなって小じわがはいはい

かみもすっかり白くなって

おまけにまんなかうすくなり

そのうえ眼つきがとろんとして

うすぎたない老人になったということさ

かわるものか

かわれるはずもない

気ぐらいだけはいやに高くて

そのくせなんの才能もない

気がちいさくてひっこみ思案

他人の痛みにはきわめて冷淡

伏眼がちに人を見あげて

くちびるゆがめて笑うのも

すべてまやかし、こけおどかしの擬態

いざとなればいつのまにかいなくなる

ほんとはなかみが空っぽだからさ

そうでしょう、だいいちこんなにしやべれるのも

ほくがとっくに死んでいるからだ

ひさしぶりに、あの世からまいもどってきたほくの眼に狂いはなかったというわけで

とってもいい気分になってくる

やっぱり死んでよかったなあ

もともとあんたはそういう人だ
 ぼくが自殺した日曜日
 あんたは女房とこどもをつれ
 捕虫網をふりまわして
 無邪気に蝶を追っかけてた
 ぼくがくらしい森の中でよこになり
 うっすらあけた眼の中に
 ふっと浮んでいた白い雲を
 あんたもどこかでながめていたにちがいない
 あんたがいつも笑っていた
 小市民的幸福とやらにとっぷりつかって
 あんたはそれに満足できる人間だった

ぼくの死体が発見されたとき
 あんたはぼくをよう見なかった
 イメージがこわれるなんてキザなせりふで
 あの晩、あんたはこの座敷にへたりこんで
 おいおい泣いていたそうだが
 わかっている
 あれはこわかったんだ

とつぜんぼくがあんたの掌のうちからするりとぬけ
 あんたのカクメイやハンギヤクのラッパも玩具になって

あんたのどこかにひっかかった異質のとげを
 あんたはなみだで流そうとしたんだ
 あんたはぼんやり考えた
 なぜぼくが自殺したかを
 とうとうわからなかったようだね
 あんたにはわかるまい
 わかるはずもない
 あんたは必死に生きたことなんかなかったんだから

このごろのニhilめかしも
 ただすこしとしゃって
 さびしくなつてのくりごとにすぎまい

では、死ねない人、さようなら
 死ぬまでのんびんだらりと生きたまえ
 あいもかわらず、今までどおり
 起きてたばこを売り
 くって、ねて、また起きて
 あんたは楽に死ぬためには

この世ではなにもしないことだと
さっきも、したり顔で
ぼくにいったじゃないか

(1974)

季刊文芸誌

コンミュン今再び

発行所／京都市右京区太秦西野町一八一八 土岡忍方

(定価 二五〇円)

△一号目次▽

宮沢賢治試論／樋口武二 第二維新論―序／松
本健一 詩・冷たい夏／沢木進 辻潤覚え書／
大月健 伝説の三輪山コンミュン―序／浅茅
原竹毘古

△二号目次▽

第二維新論―2／松本健一 更科源藏論／大月
健 詩＊におい・いへん／仲程昌徳 鋳戸がお
りる／有馬アツ子 一九七四年十月二十一日／
三浦玲子 きょうの標べに／土岡忍 伝説の三
輪山コンミュン／浅茅原竹毘古

亡 靈 洋 島 高

海燕書房から

アナキスト詩集五冊がおくられてきた

親しい連中に進呈しようと

まづむかしの戦場の仲間だったAに

ある忘年会の席上手渡した

まわりのものが

それなんの本やとたずねるなかを

彼はおしかくすようにカバンのなかにしまいこんでしまった

そのしぐさがわたしには不審だった

翌日、三ノ宮の小奇麗な喫茶店で

弟に会った

弟にも一冊手渡した

弟は詩集をめくりながら

△こんな本、だれに見せてもかまへんのか△と言った

△かまへんのか△って本屋に売ってるがな△

わたしはまた不快になった

ひとつの言葉をおそれ、敬遠する心情が

いまだに人々の心のなかに

亡霊のように生きつづけているのだろうか

その晩、わたしはアナキスト詩集が

とぶように売れる

夢を見た